



深んど

上田三四二

深んど

上田三四二



平凡社

深^{ふか}んど

定 価 一、四〇〇円

発行日 一九八一年五月十二日 初版第一刷発行

著 者 上^{うへ}田^だ三^み四^よ二^じ

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四の一

郵便番号 一〇二

電話 東京(〇三)二六五—〇四五—

振替 東京八一二九六三九

印刷 図書印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

© 上田三四二 1981 Printed in Japan

落丁・乱丁本のお取替えは直接本社サービス課
までお送り下さい(送料は小社で負担します)

深
ん
ど

深
ん
ど

目
次

深
ん
ど

121

妙
見

89

鷺
娘

65

片
居

31

転
校

7

補助線

151

客人

181

市隠

207

あとがき

236

裝幀 山高登

轉校

近くに小学校がある。

家にいるといろいろな放送がきこえてくる。学級委員の人は集ってくださいという幼い声につづいて、山川先生電話です、至急職員室へ、といったのが流されたりする。

秋になると音楽がきこえ、元気のよい号令がきこえて、運動会の近づいたのがわかる。ことしもまた、それが始まった。

数年まえまでは勉強部屋の出窓をあけるとそこは雑木林で、林の向うの細い道をへだてて校舎の端が冬のあいだ木の間に見え、音楽の時間に歌う声が切れ切れにきこえてくることもあった。その後、林が拓かれ、家が立て込んでからはそういうことはなくなって、拡声器の声だけが学校の所在のちかいのを告げている。

私がここに住みはじめたころ、この学校はまだなかった。櫟や檜や栗やえごの木に、松

のすこしまじった一面の雑木林だった。そこに通う子供たちもまだ生まれていなかった。

家の横手の路が通学路になっている。今日も郵便を出しにいつて、下校する低学年の群れのなかを分けるようにして帰って来た。彼らの眼に、この自分はどう映っているのだろう、と思う。近ごろひどく眼の悪くなった私に、日向くさい匂いをたてて走ったり立止まったりして行きすぎる子供たちが顔の区別などつかない一様に小さな生きものに見えるように、彼らにとって私というこの髪の毛の白くなった憂鬱そうな男は、相当な老人と映っているにちがいない。そう思った。

数日まえ、その路で五、六年生見当の女の子が二人、話しながら帰るのに出会った。一人がランドセルを背負っていて、その革紐に両脇を括られた胸が、膨らんでいる。陽に向って歩いてくるので、眼の悪い私に、膨らんだ胸の輪廓が光の部分と影の部分になって見分けられた。白いブラウスを着ている。

子供たちを見るにつけても、このところ、私は自分の子供のころを思い出すことが多くなっている。郷里の小学校で同窓会があったからだ。

私は郷里の小学校に五年生までいて、最後の年に、同じ県下でもずっと離れた、郊外地めいた土地の学校に移ってそこを卒業した。以来、田舎に帰り住んだことがない。父も母

も亡くなってからは、親戚の祝儀不祝儀にも特別の場合のほかは帰ったことがない。気持の上でも、そこを故郷とおもう心の薄さに自分でもおどろくほどだ。

その田舎から、同窓会の誘いが来た。私を卒業生あつかいにして、四十年ぶりの同窓会に出るようにはからってくれたのである。少々晴れがましい事柄で私の名前が新聞に出た。それがきっかけであるらしかった。

同窓会は八月下旬に行われた。出席できなかったが、予定では小学校に集って、そこから車を仕立ててすこし奥に入った河べりの「いこいの村」というのにくつろぎ、旧師を囲んで歓談することになっている。その車に乗って行くあたりの地理に、どのような記憶の引っかけもない。私の生まれた村は戦後となりの町を中心に五カ町村が集って市になった。それからというもの、村は私のなかで取り止めのないものになってしまっている。ただ小学校の木造平屋の校舎二棟と、子供の時代特有の拡大性をもつただっ広い校庭だけが、もの悲しく懐かしい情緒をともなって脳裏に蘇るだけだ。

秋の彼岸も終ろうとするころ、念の入ったことに、その同窓会の報告書が送られて来た。当日の記念写真と同窓会名簿が添えてある。ばかりか、封筒の中からは四十年まえの卒業写真の複製があらわれた。

同窓会の記念写真は男十九名、女二十一名が二人の老先生を中にして「いこいの村」の芝生に並んでいる。中年も終りにちかいその顔が、誰だかほとんどわからない。女の方ははじめから知らない。当時、どの学年も男子一クラス、女子一クラスで、クラス間の交流はなかった。同じ部落から通う者も、男の生徒と女の生徒は別々の場所に集合して、列をつくって登校した。

そんなふうだから、送られてきた卒業写真も、男子一組だけのものである。

四十二人の六年生全員が玄関前に三列に並んでいる。もちろん私はいない。最前列は腰を掛け、真中に校長先生と四年から持上りになった船津先生がいる。菊や盆栽の陳列の要領で一段ずつ高くなっている最後の四列目は先生方が並び、五人の女の先生はみな和服で羽織を着ている。袴もはいているが、胸から下はかくれて見えない。生徒の中にも緋の着物を着たのが二人まじっている。思ひ出す。一人は牛のモーヤンといった。校門を出たところに家があって、昼は食べに帰っていた。それを羨ましがると、「麦飯やでな」と言った。もう一人の小柄で華奢なのは今井で、彼は三年生のとき、担任の赤尾先生がめったにない物語をしてきかせてくれたその特別の時間に、一番まえの席で机に頭をつけて寝込んでしまった。それは天狗の物語だった。天狗からもらった面をかぶると、その鼻がずんず

ん伸びて、お大名の屋敷にとどくといった話だった。話が終って、しんとしていた教室にざわめきもどるころ、彼は目をさまして、ここはどこだろうとあたりを見まわすと、自分を見つめる先生の眼とぶつかった。叱られる。そう思ってたが、思いがけないことに、きょんとした彼を見下している先生の髭が動き、唇がゆるんだ。眼も笑っている。教室はたちまち緊張が解けて、みんな歓声をあげた。口々に今井を笑い合うことによって、叱らなかつた先生に感謝したのである。この今井は或る時期、昼食を小使室でとっていた。虚弱児童の何人かを対象に学校給食が行われていて、彼はそのなかの一人だった。着物姿の生徒は少なくなっていたが、かくべつめずらしくはなかつた。太っていた牛のモーやんは、はだけやすい懷を帯のところでぎゅっと手ばやく合わせて、ドッジ・ボールでも何でもして遊んだ。

ハッ切の複製写真の中に並ぶ豌豆大の級友の顔ははじめなかなか見分けがつかなくかつた。が、二度、三度と取り出して眺めているうち、むかしがかえって来た。みな幼く写っている。平均して、いまの四年生くらいに感じられる。

名簿をみると、卒業生四十二名のうち、名前の出ているのは二十七名である。あとは物語者で、その大方が戦死であることは、いつか法事のついでに寺の忠魂碑の銘板に名を数

えたことがあって、知っている。女性の方は四十八名もいる。ほとんど姓が変わっているのも、私をおどろかした。彼女たちにもっとも配偶者をみつけないく世代として、育ってきたはずだった。男は三分の一が死に、女はみな生きのびて孫を抱くような年齢になっている。そのことが、なにかひどく不公平なことのようにも思われた。

私は自分の卒業写真がみたくなかった。

それは母が持っていて、亡くなったあと、田舎とは縁が切れたような他郷での生活がつづいたので、手許に戻らないままになっている。一枚の写真ではなく、コロタイプにしたアルバムだった。そこで私はどんなに写っていただろう。級友たちはどんな顔をしていただろう。送られて来た郷里の学校の卒業写真をまねにして、私は思い出そうとした。思い出せる顔もある。思い出せない顔もある。着物の生徒はいなかった。六年生、一年のあいだだけいたその学校を、私は郷里の五年間いた学校よりものつくしう思い出している自分に気がついた。

それは小さな学校だった。どの学年も男女あわせて一クラスで、高等科を入れても八クラスしかなかった。ほかに、卒業生のうち女子を対象に裁縫や作法を教える特設の補修科というのが付いていた。長い袴をつけた補修科の生徒たちは大人びてみえ、しとやかに、